（別添様式４）

令和５年度　学校評価実施報告書

学校名（　　西院中　　学校）

教育目標

校是　　夢から志へ　～

志確かに“今より生きる！”

教育目標

○　広い視野をもち、多様な価値観を大切にし、自らの生き方や社会の在り方を創造していくことができる人間の育成　（キャリア教育）

○　常に学ぶ姿勢を大切にし、将来にわたって、豊かにたくましく生き抜くことができる人間の育成（学力向上）

○　礼節を重んじ、自他の存在を尊重し、命を何よりも大切に生きていくことができる人間の育成（道徳教育・人権教育）

年度末の最終評価	
自己評価	教育目標の達成状況、次年度に向けた見直し
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策

学校関係者評価の評価日・評価者

	評価日	評価者
中間評価	令和５年１０月３１日	学校運営協議会
最終評価		

（１）「確かな学力」の育成に向けて　『学力向上プラン』

重点目標

○ すべての取組が“生き方”にはたらく教育（学習）活動の推進

○求められる資質と能力を確かに自分のものにできる授業の創造

○主体的で対話的な学びを引き出し、深い学びに導くことができる授業の創造

○生徒自らが課題を設定し、解決のために学び深めていくことができる探究活動の推進

○伝え合い、認め合い、正しく批判し合う、言語活動の推進

具体的な取組

・全ての教育活動でキャリア教育の視点を持ち、小中一貫教育による９年間を見通したカリキュラムマネジメントの推進 → 小中合同の研修や打合せにより探究活動推進校としての取組の推進を含め総合的な学習の時間等で将来にわたって必要となる資質・能力が培えるような授業の創造及び改善

・教職員のカリキュラムマネジメントに関する研修の充実 →評価（C）・改善（A）段階の一層の充実（小中合同研修で実施）

・ＧＩＧＡスクール構想の下、「情報活用能力」育てるためにＩＣＴ機器を活用した学習場面を積極的に設定し、これまでの教育実践とＩＣＴ活用を適切に組み合わせた協働的な学びと個別最適な学びの実現

・学習習慣が十分身についていない生徒や家庭に背景を持つ生徒に向け、授業と家庭学習を関連づけた課題の工夫など、基礎・基本の定着を大切にした家庭学習の習慣化→最後までその子の教育と育ちをあきらめない取組

・小中合同研修で、学校評価や学力や生活データを分析・検証、小中９年間のつながりある指導を研究

・自習室や補充学習など効果的に利用できる環境を整備し、学習が定着していない生徒を中心に効果的な取組（みらスタ等）や指導について研究

（取組結果を検証する）各種指標

・全国学力・学習状況調査、 ジョイントプログラム、 学習確認プログラム、 定期テスト等の結果

・学年ごとに行うポスター発表の取組

・生徒アンケートおよび学校評価アンケート（保護者・教職員）における学力・学習状況に関わる項目結果

・朝読書や毎月の読み聞かせの実態

・授業参観アンケート回答、個人懇談会等の保護者の意見

中間評価

各種指標結果

（全国学力・学習状況調査）

〇国語の平均正答率については、全国平均より０．２ポイント上回り、府平均より１ポイント下回っている。分類ごとに見てると、特に思考力・判断力・表現力が全国平均、府平均を下回っている。しかし、「我が国の言語文化に関する事項」については、全国平均、府平均を５．２ポイントと大きく上回っている。

〇数学の平均正答率については全国平均より３ポイント、府平均より２ポイント上回っている。分類ごとに見ても、ほぼすべてにおいて、全国平均、府平均より上回っている。しかし、「関数」の分野のみ、全国平均、府平均を下回っている。

〇英語の平均正答率については全国平均より１．４ポイントより上回っており、府平均とは同じである。分類ごとに見ても、ほぼすべてにおいて、平均ぐらいで大きな特徴は見受けられなかった。

（3年１ｓｔ）

○「総合」は、全市平均を上回る（０．３ポイント)。「社会」・「数学」が、全市平均を上回っている。特に、数学（７．７ポイント）と顕著である。社会（１．１ポイント)。しかし、英語（３．６ポイント)、理科（３．１ポイント)、国語（０．４ポイント）下回っている。今後、進路も関係していくので、学年の学力向上も課題である。

（2年 Pre１）

○「総合」は、全市平均を上回る（２．２ポイント)。１年次よりも上回り幅は大きくなっている。「国語」・「数学」「理科」「英語」で全市平均を上回っている。国語（３．７ポイント)、数学（４．２ポイント)、理科（２．１ポイント)、英語（２．７）ポイント全市平均より上回っている。しかし、社会（０．８ポイント）下回っている。例年、２年生で学力の低下する傾向があるので、引き続き学習面に力を入れていく。

（1年ジョイント）

○「総合」「国語」「算数」のすべてにおいて、ほぼ全市平均である。総合（０．９ポイント）国語（１．１ポイント)。算数（０．８ポイント)。上回っている。

自己評価

分析（成果と課題）

（成　果）

○生徒質問紙の「学級との生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」の項目では，肯定的回答意見が８２．５％であった。

○生徒質問紙の「あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級活動で話し合い、互いの意見の良さを生かして解決方法を決めていますか」の項目では、肯定的回答意見が８１．６％であった。

○保護者アンケートの「学校教育目標は生徒や保護者の願いになっている」の項目では、肯定的な回答意見が８７％であった。また、「子どもは学校での授業を自分にとって大切なものと感じている」の項目では、肯定的な回答意見が８６％であった。

○育成すべき生徒の資質・能力の一つとして「伝え合う力」を掲げ、「学力の向上と深化」に向けて“伝え合い，高め合い、深め合う言語活動の推進”、“生徒自らが課題を見つけ、追究していくことができる探究活動の推進”を目指している。従来あった小中連携や SSH 事業等これまでの校外との関わりの中で実施してきた取組と３年前のコロナ渦より、その取組に代わる形として、１年生では、キャリア教育の足がかりとなるよう「私たちの地域・社会を見つめ行動しよう」をテーマに調べ学習とフィールドワークを行った。２年生では、一人一人が課題設定を行い、その解決に向けて、自ら考え、自ら取り組んでいく探究学習（名称　スキトガ（好きをとがらせる）に取り組んでいる。３年生は、２年生から取り組んできた探究学習のポスターセッションの本発表を実施した。その２つの取組を融合し、実施していく。また、小学生にも参加してもらう方向で計画を進めている。

○特別の教科「道徳」の授業研究と評価研究を進めていく中で、授業改善や評価方法を検討していく。道徳の授業で見取ることができた一人一人の成長や変容を表記した。保護者からも一定の評価を得ている。

（課　題）

○生徒アンケートからも、「学習の内容がわかるまで粘り強く学習している」の項目では、６５％、「自分で家庭学習をしている」の項目では、５９％が、肯定的な回答をしている。

	アンケート結果からも落ち着いた学習環境の構築はできているが、家庭学習等の定着が課題である。 ○生徒質問紙の結果からも見られる英語に対する苦手意識の克服と興味・関心・意欲の向上 ○さらなる言語活動の充実や探究活動を推進していくために、カリキュラムマネジメントを通じて、子どもたちにどのような資質・能力を育むのかを明確にし、それを育む上で効果的な学習内容や活動を組み立て、教科横断的な視点で、各教科の学びと総合的な学習の時間や特別活動と関連付けていく。そのための研修会や教科会の充実 ○特別の教科「道徳」の授業研究と評価研究の継続
	分析を踏まえた取組の改善 ○特に英語科の学力向上と定着へ向けた、さらなる取組や授業改善へ向けた研究。（英語授業における TT 授業（全学年）等） ○学校評価を利用した P（計画）・D（実行）・C（評価）・A（改善）サイクルを生かし、カリキュラムマネジメントを通じて本校の生徒につけたい資質・能力を明確にし、それを育む上で効果的な学習内容や活動を組み立て、教科横断的な視点で、各教科等における学びを関連づける。
	（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標 □学習確認プログラム（１０／６（全学年）・１／２３（１、２年）の結果 □学習指導に関わる年度末反省 □１２月実施の保護者アンケート・生徒アンケート
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ○小中で共通した評価項目を設定していただけたので、９年間の育ちの変容を経年で検証できるのは、とても意義深いものであり、地域としても、「子どもたちのために、何が必要か、何ができるか」を考える参考になった。 ○「自主企画・自主運営」での生徒活動の中で、たくましく育っていると感じている。今後も、生きていくために本当に必要な学力をつけていってほしいと考えている。 ○学力の格差を補う取組として、学校現場では、限られた時間や人材のやりくりに苦慮されているように感じる。地域としても、できる限りの協力をしていきたい。

最終評価

（中間評価時に設定した）各種指標結果	
自己評価	分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題
	分析を踏まえた取組の改善

学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策

（２）「豊かな心」の育成に向けて

重点目標

キャリア教育の充実

○ 全ての取組が“生き方”にはたらく・つながる教育（学習）活動の推進

○ 自分の未来を展望するための進路学習・生き方探究教育（ファイナンスパーク学習等）・生き方探究チャレンジ体験事業などの取組の推進

人権教育と道徳教育の充実

○ すべての取組において、自分と仲間、そしてすべての人間を大切に思い、尊重できる教育（学習）活動の推進

○ 高い倫理観と差別を許さない人権感覚を身につけ、正しく判断し、行動する生徒の育成

具体的な取組

生徒の「自主企画・自主運営」を核とした活動を推進するとともに、生徒たちを見守り、大切に育てていただいている地域と一体となって協働するカリキュラムマネジメントの推進

（１）CGH（クリーン・グリーン・ハート to ハート）活動の推進

・クリーン活動…美化委員会発の学習環境の整備、地域美化等、ひと、まち、自分に貢献する学習

・グリーン活動…１、２年生による校内緑化活動から“いのち”につながる学習

・ハート to ハート活動…３年生による保育園、幼稚園、小学校、デイケアセンターにおける保育・読み聞かせ等ボランティア活動から“社会”につながる学習

（２）地域と一体となった取組への参画並びに保育園・幼稚園児、小学生など異年齢との協働学習の推進

・高齢者福祉に関わる学習…総合的な学習の時間で、地域の独居老人事情の把握、生徒主体の企画・運営による活動を通した敬老精神の育成

・職場体験学習（生き方探究チャレンジ体験）
…地域の資源である校区の職場を中心とした生き方探究教育（キャリア教育）

・震災･防災学習…校区の第一・第二自治連合会の自主防災や消防団をゲストティーチャーとして連携し、いのちを守ることについて学ぶ震災・防災学習に取り組む

・姉妹校との絆を大切にした学習…自国を大切に視野の広い国際感覚や国際協調、多文化理解の精神を育み、地域と連携した人権教育に取り組む

・西院ふれあいコンサート…地域芸能（六斎念仏）や保・幼・小・中の教育団体・介護施設の方たちが一堂に会しての音楽会の参画で、異年齢協働学習（小中合同学校運営協議会・地域生徒指導連絡協議会主催）への参加

・西院ふれあいまつり…準備もふくめた地域交流の場へボランティア活動として生徒が参画して、地域社会との協働学習の設定

（３）道徳教育、人権教育、特別活動の充実

・「いのちをみつめあう、いのちを大切にする」生徒の育成を目指す道徳教育の実践

・不登校、いじめについて未然に防止するために、課題意識を持ち、内発的な指摘の目を持つ生徒、教職員の育成

・すべての生徒が、国際理解を含んだ人権学習を通して、グローバル社会で生きていく力や感性の育成

・体験学習「ＣＧＨ活動」「職場体験」「高校訪問体験学習」など地域と連携した縦割学習で、豊かな心の育成

・挨拶、感謝の気持ちなどを伝え合う、仲間や地域とのつながりを大切にする教育実践
（教職員、生徒会共同の毎朝の挨拶活動）

・豊かな心を育み、いのちを大切にし、「生きる力」の育成に焦点を当てた特別の教科「道徳」の授業の充実と評価研究先行実施校として培った評価実践をもとに、更に研究をすすめ、質の高いものへと改善する取組

（４）規範意識と集団における協調意識の向上へむけた実践

・「生徒指導の充実に向けた実践研究」推進事業における研究指定を受け、生徒指導の三機能を活用した「つながり」を中心にすえた生徒指導の実践

・生徒指導委員会、いじめ対策委員会、不登校対策委員会の時間内会合化（ＳＣ、養護教諭、総合育成支援教育主任等と学年・学校組織の連携強化）

・薬物乱用防止教室、非行防止教室、防煙教室、情報モラル教室等の実施とカリキュラムマネジメント

・国際理解教育・障がい者教育・性教育・男女平等教育・LGBT 等に関する人権教育の充実とカリキュラムマネジメント

（取組結果を検証する）各種指標

・生徒アンケート・学校評価アンケート（保護者・教職員）における生活や社会性に関わる項目

・生徒による「自主企画・自主運営」の手法による取組の成果と課題

・C(クリーン)、Ｇ（グリーン)、Ｈ（ハート　トゥ　ハート）活動の取組の成果と課題

・教育相談アンケート

・クラスマネジメントシート

・職場体験の取組と生徒および事業所からの事後アンケート

中間評価

各種指標結果

○生徒質問紙の「人が困っているときは、進んで助けていますか」の項目では、肯定的回答意見が７９．７％と昨年度に比べて低い数値であった。

○「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」の項目では、肯定的回答意見が、９８％であった。

＜生徒，保護者アンケートより＞

○保護者アンケート「子どもはすすんで気持ちのよい挨拶をしている」の項目では、肯定的な回答意見が８４％であった。昨年度同様、高い水準を維持している。毎朝の校門での生活委員会

主催のあいさつ運動や教職員のあいさつ指導の中でもそれを感じる。

○保護者アンケート「子どもはお互いの人権を大切にしようとする気持ちや態度が育ってきている」の項目では、肯定的な回答意見が９２％と高い数値を得ている。生徒アンケート「お互いの人権を大切にし、人のいやがることをしたり、悪口を言ったりしていない」の項目では、肯定的な回答意見が８８％と高い数値であった。保護者と生徒の認識が一致している。また、保護者アンケート「子どもは友達の良さに気づき、互いの意見を認め合ったり、新たな考えを知ったり、互いに高め合ったりしながら学習や活動をしている」の項目では、８８％と高い数値であった。

○保護者アンケート「子どもは、自分には良いところがあると感じている」の項目では、肯定的な回答意見が、今年度８７％また、生徒アンケート「自分には良いところがあると思う」の項目では肯定的な回答意見が、７０％であった。若干、生徒と保護者の感覚のずれが感じ取れる。

○保護者アンケート「子どもは、夢やあこがれ、目標を持っている」の項目では、肯定的な回答意見は今年度も昨年度同様７８％という数値であった。また、生徒アンケート「将来の夢や仕事、中学校卒業後の進路について考えたり、学んだりする機会がある」の項目では、肯定的な回答意見が７９％であった。

自己評価

分析（成果と課題）

（成　果）

○“自分には良いところがあると思う”などの項目で肯定的な回答意見が多いのは、西院中学校の特色の一つである参加体験型（「人とふれあう」等）の学習を通して、人権問題を身近に感じるかたちで学習していることに起因すると考える。それが、人権意識や自己有用感を高め、夢や志を持つ生徒の割合の増加につながっている。

○今年度は、地域行事やボランティア活動の参加が増えた。また、学校内の教育活動を中心に「自主企画・自主運営」で行うことで、生徒自身で新しい取組を始めることができ、達成感を持ち、自己有用感や自尊感情を持つ生徒が増えた。その成果が、生徒質問紙の回答にも表れている。

○分掌主任を中心に、教職員が京都市人権研究集会に参加し、その内容について研修等で伝達した。

○保護者への啓発を進めたことで、保護者アンケートの「子どもはお互いの人権を大切にしようとする気持ちや態度が育ってきている」の項目の肯定的意見が９８％と高い数値であった。

（課　題）

○さらに質の高い豊かな心を持つ西院らしい生徒育成を目ざし、地域に開かれたカリキュラムマネジメントを進めていく必要がある。

○保護者アンケート「自分によいところがあると感じている」の項目の高い肯定的な回答意見が、「夢やあこがれ、目標を持っている」の項目の肯定的回答意見の上昇につながるようにキャリア教育の視点からも自らの将来を展望する機会を充実させるために、カリキュラムマネジメントを行う必要がある。

分析を踏まえた取組の改善

○年度当初に立てた重点目標や具体的な取組が効果的に機能するように年間計画を精選、変

	更しながら、課題解決に向けて、P（計画）・D（実行）・C（評価）・A（改善）サイクルを通してカリキュラムを運用する。特に、C（評価）・A（改善）段階の一層の充実を図る。生徒の活動場面を保障できるよう今までのやり方にこだわらず、「できることをやりきる」ことに重点を置く。 ○できないことを憂うよりもできることをやり切ることを取組の中で子どもたちに指導する。
	（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標 □１２月実施の保護者・生徒アンケート（「豊かな心」の育成に関する項目） □生徒指導に関わる年度末反省 □２月実施の学校運営協議会理事会での分析や意見
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ○小中一貫教育の実践を通して、児童・生徒の心を育てられていると感じている。学校運営協議会としても、より一層学校教育推進のために協力していきたい。 ○今年度、保護者が子どもの学校での姿を見る機会が数段に増えた。親が我が子への理解を深めるためにも、子どもの学校生活を観る・知る機会が多いことは、とても有り難いことである。地域としても見守り活動等日々の活動の中で、関わっていきたい。 ○登下校の見守りをしているときに、子どもたちから返ってくるあいさつが、昨年度よりは元気になってきたように感じる。今一度、人と人とのつながりという視点でもあいさつの大切さについて、学校と地域と協働して、子どもたちに教えていきたい。

最終評価

（中間評価時に設定した）各種指標結果	
自己評価	分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題
	分析を踏まえた取組の改善
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策

（３）「健やかな体」の育成に向けて

重点目標 ○ 心豊かな学校生活、家庭生活を計画的・創造的に過ごすことができる生徒の育成 ○ 心身ともに健康であることの大切さを感じ、健康・体力増進に努めることができる生徒の育成

具体的な取組

・新型コロナウイルス感染症等新たな感染症をはじめとする病気やけがに対して、その原因や予防策を正しく理解し、リスクを自ら判断して行動をとることができるなど、自身の健康を保持・増進使用とする意識と実践的態度の育成

・小中及びPTAと連携して、生涯にわたる心身の健康の保持増進を目指して、全生徒が規則正しい生活（食育を含む）を送れるような家庭生活の啓発

・非行防止教室、防煙教室、薬物乱用防止教室や指導の充実

・交通マナー向上を目的とした自転車安全教室等の安全教育の充実と自転車向け賠償責任保険加入の啓発

・スマホ・ケータイ依存の危険性について啓発及び情報モラル等の教育推進
（生徒の非行防止教室及び情報モラル教室やPTAの情報モラル教室の実施）

・社会とつながる授業（性教育）の充実
（助産師会協力による命・性教育実施）

・災害発生時の危機回避や関係機関（消防署・区役所等）との連携など、地域で自他のいのちを守り、災害発生時に役立つ危機管理マニュアルに基づく研修や訓練の実施及び自治連主催の自主防災訓練の参加

・部活動ガイドラインを遵守し、生徒自らの自主性において、全員参加を推奨する部活動の推進

（取組結果を検証する）各種指標

・生徒全員入部を推奨する部活動の取組

・学校評価に係る生徒アンケート・保護者アンケートにおける生活習慣等に関する項目

・薬物乱用防止教室、性に関する指導等の学習活動後の生徒アンケートや感想

中間評価

各種指標結果

○保護者アンケート「保護者やPTA、地域の方との連携がとれている」の項目では肯定的回答意見が８３％であった。

○保護者アンケート「学校教育活動中の健康面・安全面の配慮は適切である」の項目では、肯定的回答意見が、９３パーセントと高い数値であった。

○今年度も一小一中の取組として登下校時の地域の見守り活動で、小学生、中学生への挨拶や声かけを実施できた。

○保護者アンケート「子どもは早寝・早起き・朝ごはん・排便など基本的な生活リズムや健康に気をつけている」の項目では、今年度７８％に上昇した。この結果は、ここ３年連続で上昇している。他の項目に比べると低い数値ではあるが、前年度より、改善が見られた。生活リズムの乱れに起因する遅刻もほとんどない。生徒質問紙の「朝食を毎日食べていますか」の項目でも、肯定的回答意見が９３．２％であった。

○部活動は約９０％の生徒が参加しており、全校生徒が自ら自主的に部活動に参加できる体制ができている。

自己評価	分析（成果と課題） （成　果） ○生徒への携帯・スマートフォンの弊害やスマホを介したトラブル等についての授業を各学年で積極的に設定できた。 ○指導を要する携帯・スマートフォンのトラブル発生が、現時点ではあまりなかった。 ○以前に増して、学校と PTA、地域との連携・協力の重要性を感じられる。それにより生徒が安心感を持ち、安全に中学校生活を送ることができている。学校に PTA メールシステムや PTA ホームページの開設により、保護者が学校の様子を知る機会が増えた。 ○各部活動顧問がガイドラインを守り、全校生徒が自ら自主的に部活動に参加できる体制ができており、生徒に体力増進や心と体を健やかに育む意義などを理解させることができた。 （課　題） ○体力テストの結果が芳しくなかったので、学校生活における体力増進及び健康管理を推進する。小中での情報交換も推進する。 ○PTA、地域と連携・協働して、全生徒が規則正しい生活（睡眠や食育を含む）を送れるような啓発を進める。（早寝・早起き・朝ご飯の推奨） ○全教職員が絶えず、過去の京都市中学生の薬物事案を理解して危機意識を持つ。また、生徒と共感的な人間関係をはぐくみ、いつでも相談できる信頼関係をつくる。
	分析を踏まえた取組の改善 ○コロナも一定収まったが、ストレスや漠然とした不安からか心身のバランスを崩している生徒が、依然増加傾向にある。スクールカウンセラーや関係機関と連携を取りながら、生徒の心と体のケアをしていく。 ○参加体験型や主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた携帯電話・パソコン・スマートフォン等の弊害やトラブル等について考える授業を教職員が研修を受けて、学校独自で取り組む。 ○体育の授業、体育的行事、部活動等で体力増進を意識して行う。 ○薬物乱用防止については、引き続き地域、保護者、生徒への啓発強化に取り組む。
	（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標 □１２月実施の保護者・生徒アンケート（「健やかな体」の育成に関する項目） □生徒指導に関わる年度末反省 □２月実施の学校運営協議会理事会での分析や意見
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ○部活動や地域行事に参加している生徒の姿を見ると、たくさんの生徒が楽しそうに生き生きと参加・活動していると感じる。地域としても、休日も含めて児童・生徒が安心をして安全に学校へ行けるよう、登下校の見守り活動等にさらに尽力していく。 ○塾や習いごとで就寝時間が遅くなる子どもが、学年が上がるにつれて増えていくのは、仕方ない部分もあるが、学校生活の中で、子どもたちの心と体の健康にも気を付けていただきたい。

最終評価

（中間評価時に設定した）各種指標結果	
自己評価	分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題
	分析を踏まえた取組の改善
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策

（４）学校独自の取組

重点目標

「中学卒業時の自立・自己実現のための確かな礎（自己指導力）を築く“キャリア教育”」

・確かな学力を身につけ、生涯にわたって自ら学び続けようとする力を育てる

・“西院の子どもは西院で育てる”⇒自己有用感・自己肯定感を高める

・教育活動活性化のために地域の人材やハードの活用（カリキュラムマネジメント）

具体的な取組

○児童・生徒の姿から小・中・地域との課題の把握と共有 ⇒ 授業の評価、学校評価の活用（小中各部での情報交換、小中合同学校運営協議会との協働）

○日常的な情報交換と問題意識の共有（小中各部での情報交流）

○学力実態の分析・考察・共通理解 ⇒ 小・中合同係り会等での情報交流（９年間の学力実態：プレジョイント、ジョイントプログラム、全国学力・学習状況調査、学習確認プログラム、進学状況報告等）

○確かな手立て⇒言語活動の充実や将来に必要な資質・能力の育成をめざして同じ目的意識を持った研究の歩み⇒ 言語能力や情報活用能力を伸ばす共同研究（めあての設定・手立ての工夫・学習の振り返り・指導と評価の一体化・あらゆる場面で指導をやり切る（探究活動推進校としてのポスター発表等））

（取組結果を検証する）各種指標

・小中合同授業研修会の実施

・保・幼・小・中や地域との連携の取組

・異文化理解・国際理解の取組

・生徒アンケート・学校評価アンケート（保護者・教職員・学校関係者等）における地域貢献等に関わる項目
・各自治連合町内会、実行委員会等における情報発信と情報共有

中間評価

各種指標結果

○言語活動や探究活動を含めた西院小中連携による学力向上に向けての各校でのポスター発表
○西院小中連携による育成学級の交流、生徒指導分野の連携（小中連絡会や通級連絡会）及び６年生の英語科の授業。
○厳しい状況下の中での年度当初の小中合同職員会議を実施した。夏季小中合同研修会も実施し、研鑽を深めた。また、小中授業交流も実施する予定。
○生徒アンケート「地域のためにすすんで活動したいと思う」の項目では６９％と以前肯定的回答意見が低くなっている。

自己評価

分析（成果と課題）

○９年間でつけるべき力の共有と連携した実践に加え、小中連携の取組の分析やカリキュラムマネジメントに関する研修が小中連携主任、研究主任、生徒指導主任を中心に深まった。
○「生徒指導の充実に向けた実践研究」推進事業における研究指定を受け、「つながりのある集団づくり～居心地のいい学校を目指して～」を研究テーマに生徒指導力の向上に関する取組を教職員が積極的に実践している。
○地域の保・幼・小・中が連携した地域に開かれた教育が、学校運営協議会を中心に展開できている。また、保・幼・小・中の１２年の成長を相互の交流で見守ることができている。
○小中連携から得られた情報をもとに、中学校で組織的・継続的に対応することでいじめ事案の未然防止及び新たないじめ事案が減少した。
○小学校時の不調等が理由で登校できなかった生徒が、取組を行っていく中で改善傾向になってきた。

（課　題）

○不登校傾向にある生徒が一人も出ないようにするための学校づくり。分析を踏まえて取組を改善する。
○言語活動の充実を図り、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行うことで質の高い学びを実現する。
○１２年間の学びの連続性を大切にした開発的生徒指導や学力向上にむけた取組を継続していく。
・園児，小学生と生徒会の連携事業により、さらなる自己指導力の向上を目指す。
・探究活動推進校として小中間の連携をさらに強化し、生徒の「探究する力」を校種横断的に伸長する。
・小中連携した９年間継続した道徳授業の改善や評価の研究を継続する。
・小学校の英語活動、英語科で、小中連携した学びの連続を図る。（中学校教諭の TT 参加）
・地域と小中が連携した朝読書や読み聞かせの取組を継続する。
○不登校傾向にある生徒に対する取組として、生徒指導部が主体となり担任・学年と家庭、

	関係機関との連携を強化することで支援を強化する。
	分析を踏まえた取組の改善 ○言語活動の充実を図り、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことで質の高い学びを実現し、思考力・判断力・表現力等の育成を重視するために教科等の教育活動の充実を図るための研修や教科会の充実を図る。 ○１２年間の学びの連続性を大切にした開発的生徒指導や学力向上にむけた取組を継続する。 ・園児、小学生と生徒会の連携事業により、さらなる自己指導力の向上を目ざす。 ・総合的な学習の時間を中心に教科横断的な視点で、小中間の SSH 事業のさらなる連携強化の充実を図る。 ・小中連携した 9 年間継続した道徳授業の改善や評価の研究を継続する。 ・小学校の英語活動、英語科で小中連携した学びの連続を図る。（中学校教諭の TT 参加） ・地域と小中が連携した朝読書の時間に行う読み聞かせ活動の取組を継続する。 ○不登校傾向にある生徒に対する取組として、生徒指導部が主体となり担任・学年と家庭、関係機関の連携を中心とした支援を強化する。（「つながる・つなげる」ことで居心地のいい学校づくり）
	（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標 □１２月実施の保護者・生徒アンケート □各分掌における年度末反省 □２月実施の学校運営協議会理事会での小中一貫教育の成果等に関する分析と意見
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ○学校のさまざまな教育活動を通じてキャリア教育を推し進めていく上で、必要な人的・物的資源として地域をどんどん積極的に活用してほしい。地域としても協力していく。 ○学校として、個々の生徒の状況に応じて丁寧に粘り強く寄り添っていってほしい。しっかりと力を付けて、進路実現をして社会に巣立ってほしい。 ○一人一人の子どもたちが、活躍できる場を作っていきたい。地域行事や地域活動に子どもたちが積極的に参加してくれることを期待している。

最終評価

（中間評価時に設定した）各種指標結果	
自己評価	分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題
	分析を踏まえた取組の改善

学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策

（５）教職員の働き方改革について

重点目標 ・教職員が心身ともに健康に勤務できるよう業務の質的転換を図り、適正な勤務時間の中で最大の効果を上げられる環境を構築する。 ・教職員一人一人に勤務時間を意識させ、子どもと向き合う時間を十分に確保するために、働き方に関する意識改革推進する。
具体的な取組 ○出退勤システムによる出退勤時間の記録や留守番電話による電話対応終了時刻の設定 ○学校行事、取組の精選や会議の効率化、ＧＩＧＡスクール構想の下、学習場面におけるＧＩＧＡ端末、ＩＣＴ機器の積極的な活用と校務における採点ソフト等を利用することで業務の効率化を促進 ○部活動ガイドラインに基づく適切な休養日・練習時間の設定
（取組結果を検証する）各種指標 ・出退勤管理システムによる出退勤時間の記録や時間外勤務の状況 ・年休取得率 ・月行事・年間行事予定の検討と吟味の結果

中間評価

	各種指標結果 ○教職員一人一人に勤務時間を意識させ、子どもと向き合う時間を十分確保するために、出退勤管理システムによる出退勤時間の記録や電話対応終了時刻や退校時間の設定と遵守等を通じて働き方に関する意識改革を推進した。 ○学校行事を精選して、質の高い教育課程の編成・実施を推進した。 ○月行事・年間行事予定の検討について運営委員会を中心に学校体制で行った。 ○各部活動の活動状況を把握し、部活動ガイドラインに基づく適切な休養日及び活動時間の設置を行い、その遵守に努めた。
自己評価	分析（成果と課題） （成　果） ○新型コロナウイルスは一定収まりを見せたが、コロナ前の状態にただ学校行事を戻すのではなく、生徒による「自主企画・自主運営」は大切にしながら内容や時間を検討し、事前事後の取組を精選することができた。

	○退勤時刻の徹底を図り、超過勤務者数や超過勤務時間が大幅に減少した。 ○部活動ガイドラインは徹底できている。 （課　題） ○本市の教育でもある「生徒一人一人を徹底的に大切にする」姿勢を忘れず、教職員が心身ともに健康に勤務できるように業務の質的転換を図り、適正な在校時間の中で最大の教育効果を上げられる環境を構築する。そのために、行事の精選や会議の効率化、ＩＣＴの有効活用による校務の効率化、部活動ガイドラインに基づく適切な休養日・練習時間の設定など、日々の教育活動を見直し、学校における「働き方改革」をさらに推進し、より一層の教育の質の向上を目指す。
	分析を踏まえた取組の改善 ○カリキュラムマネジメントの視点を持ち、後期の学校行事、取組の精選を進め、超過勤務者や超過勤務時間のさらなる減少へ向けた徹底した取組を推進する。 ○学校の教育力を高めるため、教職員が組織として教育活動に取り組む体制づくりを推進する。教職員一人一人に校務の効率化や勤務時間についての意識を持たせる。
	（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標 □出退勤管理システムによる出退勤時間の記録及び時間外勤務の状況 □部活動時間とその取組状況 □各行事・取組の反省と年度末反省における来年度の行事計画検討の状況と教育課程の編成の状況
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ○教職員の方々の日頃の取組に感謝している。ただ、子どもと直接関わってくれる教職員の方々が元気でいてくれることが、教育効果をあげる意味でも一番大切なことである。働き方改革は進めていくべきである。とはいえ、教職員の勤務時間内に保護者や地域の方（PTAの会議、学校運営協議会等）は、集まるのは難しいという面もある。難しい課題である。 ○今年度は、地域行事の制限がなくなり、コロナ渦前の内容でほぼ実施しているため、教職員の方々との関わりが少し増えてきている。今後も是非ともお力をお借りしたいと考えているが、その一方で働き方改革について考えていかなければならないことは理解している。

最終評価

（中間評価時に設定した）各種指標結果	
自己評価	分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題
	分析を踏まえた取組の改善

学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策

（６）いじめの防止等についての取組に向けて

重点目標

すべての教職員が「いじめはどこでもいつでも、どの子どもにも学校にも起こり得る」という危機意識の下、「好ましい人間関係を築き、豊かな心を育てるとともに、いきいきと学ぶことができる魅力ある学校・学年・学級づくり」、「おだやかな気持ちで生活し、学習活動に集中できる教育環境の整備」に取り組むことで、いじめを生まない西院中学校づくりに努める。

具体的な取組

「学校いじめの防止等基本方針」に同じ

（取組結果を検証する）各種指標

① 全教職員が学校いじめの防止等基本方針の内容を理解し、組織的対応に努めている
② 学校のいじめ対策委員会のメンバーを生徒に紹介している
③ 学校評価アンケートにおける「私は、学校へ楽しく通っている」及び「私は、お互いの人権を大切にしようとする気持ちや態度が身についている」の項目
④ 生徒・保護者の訴え（アンケート結果含む）や相談内容を組織として共有している
⑤ 保護者や学校運営協議会等に、学校いじめの防止等基本方針や学校の取組を説明・周知して
いる

中間評価

各種指標結果

①年度当初の校内研修会おいて「令和５年度いじめ防止等基本方針」の内容・取組を全教職員で周知し、対策法など共有した。また、教職員アンケートの「教職員は学校いじめ防止基本方針の内容を理解し、組織的対応に努めているか」の項目に対して、肯定的な回答が、９５％であった。

②いじめ対策委員会のメンバーについては、新入生歓迎会終了後に、全校生徒に対して対面で紹介している。

③クラマネ及びいじめアンケートを実施した。その結果として、いじめアンケートでは、設問１で「はい」と回答した生徒数は、学校全体で２０人もいた。特に１年生が半数を占めている。しかし、現在は、継続していやな思いをしている生徒はほとんどいない。クラスマネジメントシートでは、「クラスの雰囲気は子どもたちにとってとても居心地のよいものとなっている」、「クラス内で孤立する子どもがほとんどなく、お互いにサポートし合える友人関係が形成されている」、「男女の仲も良く、和気あいあいとした学級の雰囲気があり、いじめのリスクは低いと考えられる」、「クラスの雰囲気は比較的落ち着いている」という分析結果が出た。

③保護者アンケート「子どもは友達の良さに気づき、互いの意見を認め合い、新たな考えを知ったり、

互いに高めあったりしながら学習や活動をしている」の項目について、肯定的回答意見が９７％であった。生徒アンケート「先生や友達の意見をよく聞いて学習している」の項目では、肯定的回答意見が、９２％。「お互いの人権を大切にしようとする気持ちやが育ってきている」の項目では、肯定的回答意見が、９６％であった。この結果からも、他者を認め、共生・協働の意識は強くなってきていることが認められる。

③保護者アンケート「子どもは学校に楽しく通っている」の項目では、肯定的回答意見が、９１％、生徒アンケート「学校に楽しく通っている」の項目では，肯定的回答意見が、９６％で高い数値あった。学校に対する満足度が、保護者・生徒とも高いことを示している。

④週１回の補導部会、月１回の生徒指導委員会、職員会議等を実施し、相談内容の共有を図っている。

⑤学校運営協議会では、地域の方は、保護者と同様に単に結果や数値だけを知らせてしまうと「地域の学校でもそんなことが起こっているのか」「それは大変だ。」といった反応になりやすいので保護者の場合と同様、「いじめ」に対しての認識について丁寧に説明し、理解を求めている。そして、いじめは学校、家庭、地域社会等すべての関係者がそれぞれの役割を果たし、一体となって取り組むべき問題であることを説明している

自己評価

分析（成果と課題）

（成　果）

○年度当初の全教職員に対しての研修時だけでなく、クラマネ及びいじめアンケートを実施した。その際に、事前に意義や扱いについての共通理解と併せて基本方針についても再確認できた。「いじめ」について、教職員全員が意識を高く持ち、共通の理解を持って取り組むことが、少しずつではあるが確実にできるようになってきている。したがって、クラマネやアンケート、教育相談時に限らず、日々の教育活動の中で生徒の学校生活、人間関係を意識した指導を心がけて取り組めるようになってきている。

○いじめ対策委員会が校内に設置されていることやそのメンバーについては、集会や学活等で全体に紹介をしている。教職員には、常にいじめはもちろんのこと何でも、生徒はもちろんのこと、保護者に対してもすぐに相談できるような人間関係を構築するよう日頃より指導しており、教職員もそのことを意識して学校教育活動を実践している。その成果として、いじめを未然に防ぐことや事案に対しても早期発見・早期解決ができている。

○“楽しく学校に通っている”や“人権を大切にしている”の項目について、例年行っている学校行事や地域行事での様々な世代の人との交流が、人権問題や人権感覚の気づきにつながっている。活動の中で人権意識の高まりを感じ、日々の言動に反映している生徒の割合が増えているという結果が出ている。自己肯定感・自己有用感につながる思いや、人権意識の高まりを感じる生徒の割合が増えてきている。

（課　題）

○他者理解やその存在を尊重する意識は高いが、その反面、自尊感情や自己有用感に関する項目が若干低い。また、地域外への不安や弱さを強く感じる生徒の実態がある。

○ここ最近の懸案であるインターネット（スマホなど）等 SNS による人間関係のトラブルによる人権侵害やいじめ等が見えにくく、深刻化してしまってからの発覚・対処になってしまう場合がある。今のところ、目立った兆候は見られないが、今後、不登校傾向への対応も含めて深刻化・長期化することが増えていくことも懸念される。

	分析を踏まえた取組の改善 ○アンケート後に実施する三者懇談会や教育相談の期間だけでなく、日々の教育活動の中でいじめに関わるすべての記述に対して、学年体制、学校体制で当該生徒だけでなく関係生徒からも情報収集を行い、実態解明と解決に向けた取組を行っていく。また、いじめ対策委員会で、学校全体の問題として共有し、取り組んでいく。 ○一人一人の生徒が、他者を信頼し、協働していく中で自己有用感を高め、夢を豊かに描き、実現できるように各種教育活動を実践していく。 ○生徒の実態や教職員の意識・取り組む姿勢等で成果が出ていることも増えている。今後もアンケート結果や教育相談等をより的確に分析、迅速に対応するといった形で動けるように努め、いじめ対策委員会を中心に短期間での PDCA サイクルを機能させる。 ○ＳＮＳ等インターネット上のいじめ案件については、表面化した時点で深刻なこともあるので、見逃しのない指導を行う。
	（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標 □全教職員が学校いじめの防止等基本方針の内容を理解し、組織的対応に努める。 □学校評価保護者アンケートにおける「子どもは学校へ楽しく通っている」及び「子どもはお互いの人権を大切にしようとする気持ちや態度が育ってきている」の項目。学校評価生徒アンケートにおける「学校に楽しく通っている」及び「お互いの人権を大切にし、人のいやがることをしたり、悪口を言ったりしていない」の項目 □生徒・保護者の訴え（アンケート結果含む）や相談内容を組織として共有する。 □保護者や学校運営協議会等に、学校いじめの防止等基本方針や学校の取組を説明・周知する。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ○学校運営協議会としても地域としても、協力できることはさせてもらうという意見をいただいた。その上で、地域として一小一中の強みを生かし、９年間という義務教育の時間をしっかりと見守ることができている。その一方で「いじめ」もそうだが、予測不能なこれからの社会を生きていくための新しい課題に迅速かつ的確に対応していかなければならないと感じているといった意見をいただくことができた。 ○いじめの問題は、解決していくべき最重要課題の一つである。その解決に向けて、学校だけでなく、家庭・地域の連携・協力は不可欠である。 ○「だいたいそう思う」が高い項目については、その中身を留意する必要があるのではないか。「そう思う」、「そう思わない」と回答しているところは、はっきりしているのでいいが、あいまいな部分については、検証していくことも必要ではないか。

最終評価

（中間評価時に設定した）各種指標結果	
自己評価	分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題
	分析を踏まえた取組の改善

学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策